特集―遺跡のなかの民俗学 事例報告

斎宮跡は「発見」されたのか
―伝承の形成過程と遺跡―

Has the Saiku site been discovered by the excavation?
― The process of formation of the legend of Saiku site ―

伊藤 文彦（三重県教育委員会）
ITO Fumihiko (Mie Prefectural Government Education Board)

考古遺跡 /Archaeological sites
伝承 /Folklore　地域住民 /Local people
遺産保護 / Heritage Conservation

1．はじめに

（1）研究の背景[1)]

近年、文化遺産や自然遺産の保護に、地域住民が参画することが推奨されている。例えば、遺産保護の世界的枠組みである世界遺産条約においては、2007年の第31回世界遺産委員会において「先住的、伝統的、地域的コミュニティの参画が条約の履行には極めて重要である」との認識に基づき、世界遺産委員会の戦略的目標の一つに「コミュニティ」が追加されている[2)]。また、世界遺産条約の事務局であるユネスコとその諮問機関は、「遺産の保存管理がより複雑化するにつれて管理の実践の進化が求められており、（中略）管理運営のアプローチは遺産の管理運営のより広範でより包括的なアプローチへ、そしてコミュニティの参画がより強調されるものへという変化に対応しなければならない。」と指摘する[3)]。日本国内においては、これまで文化財の保護を担ってきた地域社会が縮小する中で、「地域社会総がかり」での文化財保護を目指すとして平成30年（2018）に文化財保護法が改正されている[4)]。

しかし、国際的な枠組みや法律の整備、あるいはそれにともなう研究者や行政による普及啓発活動のみで地域住民の「保護意識」が高揚するとは限らない[5)]。遺産の保護に地域住民が参画するためには、住民と遺産との意味のある関係性が重要になると思われる。すなわち住民は遺産が自らの日常生活や伝統、次世代への教育等に関係すると感じた場合にはじめて積極的に遺産保護に参画するのではないかと思われるのである。

図1　斎宮跡位置図

古代から中世にかけて斎王が伊勢神宮祭祀のために居住した宮殿とそれをとりまく官衙の遺跡である三重県所在の国指定史跡斎宮跡においては、史跡保存において住民が極めて大きな役割を果たしていることが知られている[6)]。さらに明治時代から昭和初期においては、当地が斎宮跡であるという伝承、考究に基づく、地域住民による顕彰・保存活動があったことも指摘されている[7)]。しかし、斎宮の故地であるという伝承が当地においてどの様に語り伝えられてきたのか、すなわち、地域住民が「斎宮」をどのように認識し語ってきたのか、についてはこれまで検討されたことはない。

この検討は、地域住民と斎宮跡との関係性を再確認することに寄与すると思われる。

斎宮の衰退期以降の状況を扱った先行研究は決して多くはない。大川勝宏は考古資料を中心に整理を行い、平安時代後期に斎王の宮殿である内院は牛葉東地区で再編され鎌倉時代まで継続すると指摘した。そのうえで、方格地割内部には聖性を維持する内院が見られるとともに、方格地割外部では世俗的機能および在地社会が展開すると指摘した[8)]。天野英昭は文献・考古資料の双方から中世の斎宮には方格地割の意識が継承され、隍中と隍外の空間的差異が存在したことを指摘した[9)]。伊藤裕偉は文献・考古資料の双方の検討から、斎宮における中世から近世にかけての想定される交通路、関所の所在地、関連施設の位置について指摘を行い、中世後期の状況を丹念に整理した[10)]。このほか、榎村寛之は斎宮の地名が伝承されてきたことを指摘し、特に「野々宮」は斎宮の中心地だったという伝承があったにも関わらず幕末から近代に行われた研究の結果、方格地割北西部にあたる「斎王の森」を斎宮の中心地と推定し、その後は斎宮の旧跡は斎王の森という認識が定着したとする[11)]。しかし、これらの論考は集落の展開や街道の変遷、社会の在り方に注目しており、榎村の指摘も地名の伝承には歴史的事実が含まれる場合があるという指摘にとどまっている。

そこで本稿においては、宮殿・官衙機能時から廃絶後にかけて、具体的には平安時代後期から現代にかけて、今日斎宮跡として把握される当地を、地域住民が斎宮とどのように関連付けて認識し語ってきたのかを明らかにする。

（2）研究方法

まず、考古遺跡としての斎宮跡の発掘調査結果から、土器の出土地点の分布状況を把握し、先行研究の成果を踏まえて、斎宮における人の居住地や街道筋の変遷を推定する。具体的には、これまでに刊行されている発掘調査報告書および概報書に掲載されている土器の実測図を調査し、各時代の土器がどの地点（発掘調査次数）で出土しているかを把握する。

ついで、実際に斎宮／斎宮跡を来訪するなど、現地に関する記述のある旅行記等文献史料を抽出し、これら文献に記述される事物・事象について、記述者が事物・事象についてどのような説明を聞き、どのように理解したかを整理することで、地域住民が斎宮／斎宮跡をどのように語っていたかを把握する。

最後に、遺されている絵図や、今日も斎宮跡で見ら

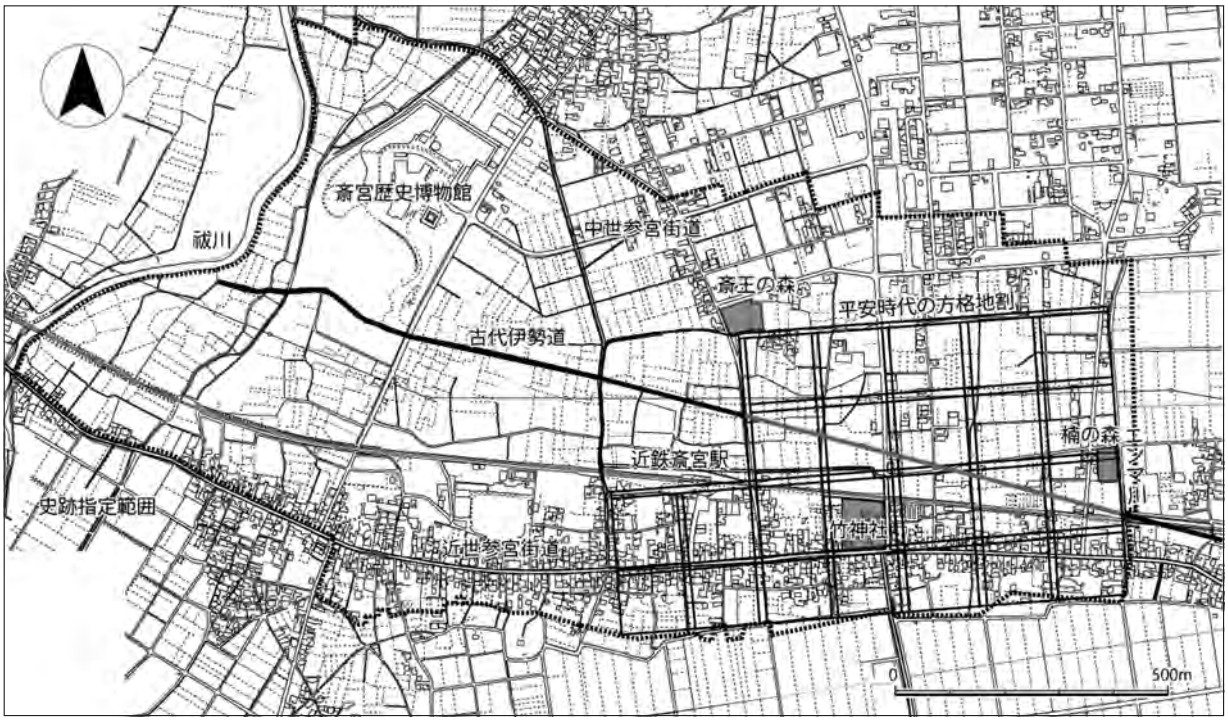

図2　斎宮地内関係位置図

れる事物を踏まえ、住民等が斎宮のどの地点において、何を媒体とし、どのように語っていたかを整理することで、地域住民の斎宮／斎宮跡に対する認識の経過を考察する。

なお、本稿においては、史料中に登場する斎宮の記述を「【斎宮】」、斎宮機能時における宮殿・官衙を「斎宮官衙」、概ね今日の史跡指定範囲に相当する「斎宮」の立地箇所を「斎宮地」、概念上・歴史上・想像上の存在としての斎宮なるものを「『斎宮』」と表記して区別する。

2．斎宮跡伝承の形成過程

(1) 11世紀～13世紀

発掘調査の結果からは、11世紀段階から13世紀にかけては現在の竹神社とその周辺で広く当該時期の土器が出土している。先行研究では、竹神社周辺に内院が存在したことが指摘されている。

11世紀の斎宮地を記述した文献としては、『春記』が挙げられる。長暦２年（1038)、藤原資房は斎王の下向に従って斎宮を訪れている。

〈史料１〉

廿八日辛酉、朝間天晴、未以後、雨脚降太滂沱、巳時許、令立壹志頓宮饗等如例云々、於小河有御禊、未時許、於飯高河御禊、此間甚雨如渡進退無術、酉時後、於櫛田河御禊、雨休止、一尺余許赤虵蟠候、人々見之、所疑者、是神虵也、似有感応云々、又事烝宮等参候云々、太宮司可儲輿丁食、而不儲、太懈怠也、戌時許、着御御在所、但今日日次不宜、仍蹔御勅使房也、明可移御本宮也

資房は「櫛田河」で禊を行い、「御在所」に到着する。御在所では、まず「御勅使房」に入り、翌日に「御本宮」に入る。「御在所」は斎宮官衙の事と考えられ、そこには複数の建物があり、各建物には名称が付され、その機能も認識されている状態であると理解される。

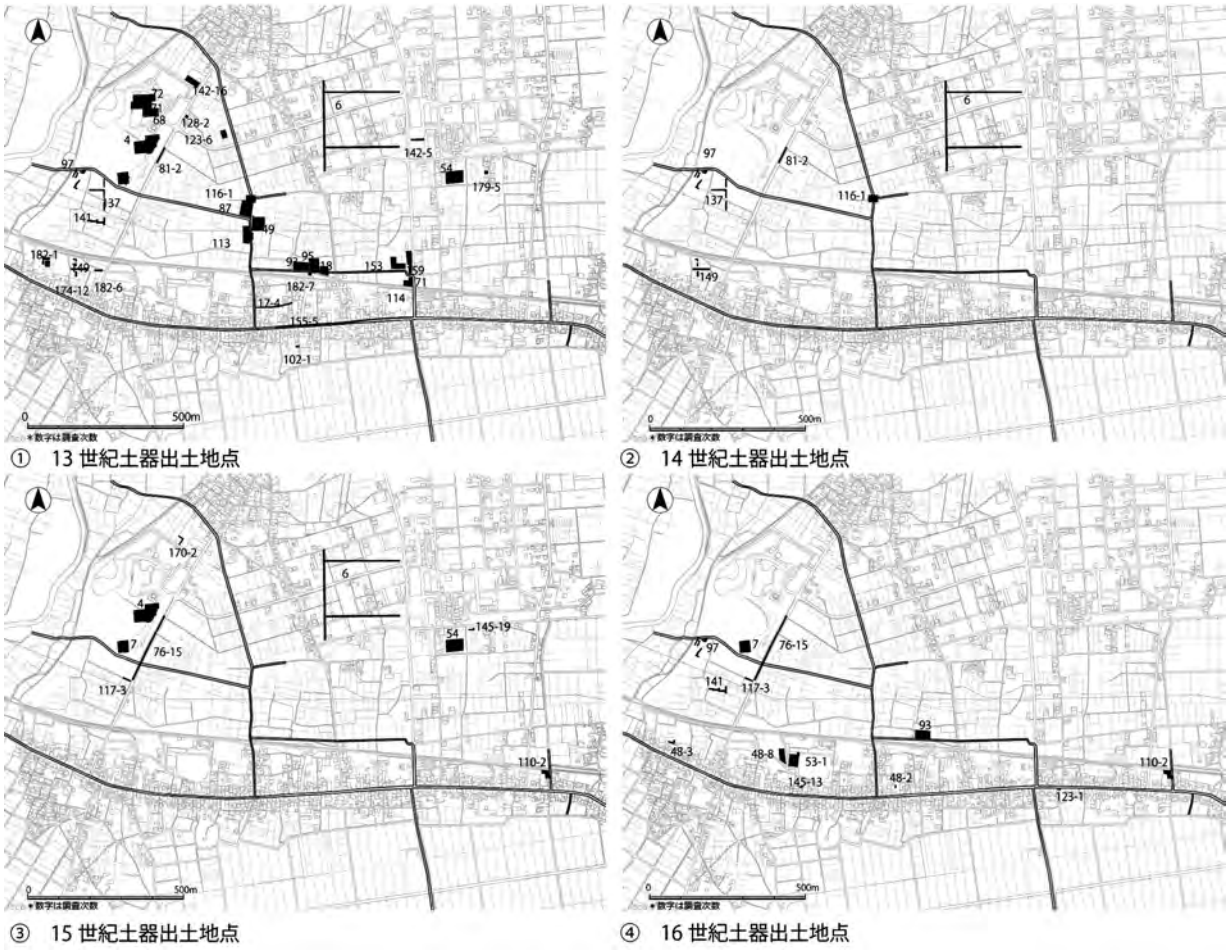

図３　時代別土器出土位置図

12世紀の文献には、藤原宗忠の『中右記』がある。永久２年（1114）に伊勢神宮への勅使として伊勢へ下向した藤原宗忠は当地を通過する際に斎宮地にかかる記述をのこしている。

〈史料２〉

至櫛田川東辺太神宮検非違使二人来迎、一人ハ付神宝、一人ハ先行、至多気川祓、官人儲祓物、向戌亥引立神馬舁置神宝、午刻過斎宮北面方、神宝過南門前、斎宮女房立車見物

宗忠は、「櫛田川東辺」、すなわち西から東へ櫛田川を渡ったのち、「多気川」で祓を行っている。その後、【斎宮】の「北面」を、神宝は「南門前」を通過しており、「斎宮女房」が「車」を立てて見物している。この時期も斎宮地には【斎宮】と呼ばれる建物があり、それには、北面や南門が存在している。さらに「女房」がいて「車」を立てて勅使の行列を見物するなど、斎宮官衙に所属する官人の存在が看取される。

発掘調査の結果とこれら記述からは、現在の竹神社とその周辺に「御在所」や【斎宮】と呼ばれる建物群が存在し、そこには「御勅使房」や「御本宮」と呼ばれる機能の明確な個別の建物が存在し、さらに「斎宮女房」と呼ばれる官人や「車」のような道具類も見られ、これらを媒体として、実際に宮殿・官衙が機能する斎宮官衙として認識されていたと考えられる。

鎌倉時代について、発掘調査の結果からは、この時期、現在の竹神社周辺でも限定的に土器は出土しているものの、それよりもより西北側に広く土器の出土が見られるようになる（図３－①）[12]。さらに、現在の斎宮歴史博物館の北東附近でも土器の出土が見られる。これらは、中世の街道筋であるとも考えられる。この時期に斎宮地に来訪した旅の記録等は管見では存在しない。しかし、この時期には愷子内親王が斎宮地に滞在したことが知られており（1264～1272年）、これが実際に伊勢に下向した最後の斎王となる。斎宮地に斎王が滞在していた時の状況は、平安時代後期から末期の状況と大きく変化はなく、斎宮官衙として認識されていたものと考えられる。

（2）14世紀

14世紀に入ると、土器の出土状況に大きな変化がみられる。この時期、竹神社付近はじめ、方格地割内部における土器の出土はほとんどみられなくなり、遺跡の西部に土器の出土が見られるのみとなる。また、西側から斎宮地へ接続する街道の経路は、もっとも北側を通る経路になると考えられる。

この時期の文献としては、坂十仏の『太神宮参詣記』が挙げられる。康永元年（1342）に伊勢神宮へ参詣した坂十仏は、斎宮地を通過するにあたり、詳細な記述を遺している。

〈史料３〉

櫛田川祓殿をもすぎて行くほどに。世中みだりがはしくなりしより。国のみなみはあらぬ處のやうにあれはてて。竹のはやし杜の木がくれのにぎはひたるも。近づきみれば人屋もなし。すすきかるかやの絶まに。かりはねおほきはりみちあり。をのづからあふ人にとへば。これなむあらを田のなれるはてよとこたふるを聞に。いとどかはれる世の有さまもかなしくて。斎宮にまいりぬ。いにしへの築地のあととおぼえて。草木の高きところどころあり。鳥居はたふれて朽のこりたる柱の道によこたはれるを人だにもかくとしらせずは。ただふし木とのみぞみてすぎなまし。斎宮と申はたえてひさしき跡なりしを。近此再興あるべしとて花やかなる風情などもありしかども。芳野山のさくら常なきかぜにさそはれ。嵯峨野の原の女郎花あだなる露にしほれしかば。野宮の名のみ残りて。斎宮の御下りにもおよばず。

この記述によれば、まず、櫛田川を渡河すると、竹林、林、ススキ、カヤの生い茂る場所があり、その後「かりはねおほきはりみち」を見る。ここで、十仏は「をのづからあふ人」に問い、その答えから、これが荒れ果てた水田であると認識する。十仏はその後、【斎宮】へ行く。そこでは「草木の高きところどころ」を見て「いにしへの築地のあと」と認識する。さらに、「朽のこりたる柱の道によこたはれる」を見て、「人」が教えてくれたので、「鳥居」であると認識する。さらに、ここには「野宮の名のみ残」るとする。このように、十仏は、斎宮地において、荒れた土地や草木の高まり、倒れた木材を目にしたときに、その場所で

出会った「人」が「かくとしらせ」たことから、斎宮官衙の遺構として認識できたものと考えられる。つまり、その「人」はこれらを斎宮官衙の遺構として認識し、「野宮」の名で呼んでいたと考えられるのである。

一方、地勢、発掘調査状況を合わせて検討すると(図２－②)、まず、水田が立地するのは、現在の祓川が流下する谷底平野であり、斎宮官衙の立地する段丘上ではないことに気づく。そこを過ぎてから【斎宮】へ到着するのは現在の地理的状況と符合する。一方、十仏が目にした遺構の所在地は判断材料に乏しいが、十仏来訪より70年前の愷子内親王の時代の建物遺構であれば、竹神社付近とその西側付近であると考えられる[13)]。

では、十仏が出会った「人」とはどのような人々であったのだろうか。ここで最初に出会った人物が「をのづからあふ人」とされていることに注目すれば、十仏の道連れでないことは明らかである。さらに、すれ違う旅人が特定の地域の由来や歴史について十分に詳しいとは考えにくく、偶然に出会った「人」は斎宮地の住人であったと考えるのが自然であろう。

以上の整理から、14世紀段階においては、位置は不明確であるものの、地域住民は斎宮地にみられる遺構を媒体として、それを「野宮」という名称を付した『斎宮』の痕跡として語っており、地域住民はこの地を斎宮跡として認識していたものと考えられる。

(3) 15世紀

まず、土器の出土状況を確認すると、15世紀代に入っても、方格地割内部に土器の出土はほとんど認められない（図３－③)。土器が出土しているのは、斎宮地でも東部の110－２次調査地と西部、北部である。

ついで、この時期の文献を検討する。まず、花山院長親が応永25年（1418）に伊勢神宮へ参詣する足利義満に同行した際の日記である『耕雲紀行』の記述をみる。この紀行文においては、復路において『斎宮』にかかる記述がみられる。

〈史料４〉

こゝかしこゆきすきて、斎宮のつしといふ所あり。むかしの斎宮のあとなり。木竹しけりあひて、いつくともみえぬやふのうちなり。あれてひさしけれとも、いまもそのしるしに、空より繪馬かくることたえす。これによりて土俗あるひはゑむまのつしともいふとかや。さきさきはきかす、このたひの下向に、案内者ありてかたりしかは、昔の事とも思いつる中に、亀山院の御代とかよ、斎宮群行の時、高祖父内大臣のおひ長雅大納言長奉送使つとめたりしそかし。ちか比は、この礼もすたれぬれは、このやふのうちをたつねとふ人もあらしかしと、あはれにて、

みやこ人こゝにいつきの宮あれてゑにかく馬のいさみなの世や

この記録において、長親は「木竹しけりあ」う「やふのうち」を目撃し、ここが「斎宮のつし」と呼ばれ、さらに「斎宮のあと」であるとしている。また、「案内者ありて」、ここが『斎宮』のあとである証拠として「空より繪馬かくることたえす」と語っているのを聞いており、さらに地元では「ゑむまのつし」と呼んでいることも聞いている[14)]。ここで注目すべきは、絵馬がかかることが『斎宮』がこの地に存在した証拠であるとしている点である。つまり、絵馬を媒体として『斎宮』を語っているということである。

この『斎宮』の絵馬については、別の史料にも記述がみられる。

〈史料５〉『碧山日録』太極　長禄３年（1459）

詣西宮、々前有絵馬、路人相伝曰、年々分歳夜、除旧置新、而不識誰某掛之也、玄黄白黒不定也。白則大旱、黒則大水、一歳豊倹、皆以此識也、今之画馬駮毛也、不雨不日豊登之端也

ここで太極は、【斎宮】（西宮）の前に絵馬があることを目にし、「路人」から、毎年大晦日に新しいものへ架け替えているが、だれが掛けているのかは分からない、馬の色が白ければ旱、黒ければ大雨で１年の豊凶はこれで知ることが出来る、今の絵馬は、まだら毛なので、大雨も旱もなく、豊作のしるしである、という話を聞いている。こうした、絵馬によって豊凶を占う農耕儀礼は中世においてひろくおこなわれていた習俗で、斎宮で掛けられていた絵馬もこうした習俗のひとつであり、本来はそうした農耕儀礼の一環であったとされる[15) 16)]。

ところで、長親が「やふのうち」を目撃した「斎宮のつし」とは斎宮地のどの地点であろうか。15世紀代の土器が出土しているのは、斎宮地でも東部と西部、北部である。後述するように、17世紀半ばの絵図には絵馬道という道が東部に示されており、それに隣接する川を今日でも「エンマ川」と呼称していることから、斎宮地の東部と考えて良いだろう。

また、この斎宮地の掛絵馬はその後謡曲『絵馬』へと構成されたことが指摘されている[17)]。16世紀以降の「斎宮の絵馬」については、この謡曲の物語を通して広く知られていることを考慮する必要がある。

以上の整理から、15世紀段階においては、斎宮地の東部において、豊凶を占う絵馬を媒体として、それを『斎宮』がこの地に存在した証拠として語っており、地域住民はこの地を斎宮跡として認識していたものと考えられる。

(4) 16世紀

16世紀になると、発掘調査では、斎宮歴史博物館付近の斎宮地西部、斎宮地南部の、近世以降の参宮街道沿いに土器の出土が認められる（図３－④）。この時期には、斎宮地北西から延びてくる中世の街道筋から、近世以降の街道筋へと、旅人の通行経路は変化しているものと考えられる。

一方、16世紀の文献としては島津家久が天正３年（1575）に伊勢神宮へ参詣した際の記録である『中書家久公御上京日記』がある。

〈史料６〉

次にくした河渡賃、其より行て斎宮、其次ニ絵馬をかくる鳥井有、次ニ笛吹の橋、次ニみやうしやうか茶屋

この記録では、櫛田川を渡ったのち、まず【斎宮】に至る。その次に「絵馬をかける鳥井」があり、その後笛吹の橋へと至る。つまり、15世紀までの状況とは異なり【斎宮】と「絵馬」の地点を別地点として理解していると考えられる。まず、「絵馬」の地点について確認する。時期は下るが、承応３年（1654）の絵図（図４）[18)]（以下、承応の絵図）によると、街道周辺で鳥居は「野々宮」と、絵馬ノ橋の北側、絵馬ノ道の西側にある「森」の二か所で認められる。この森の位置は今日の「楠の森」の位置にあたる[19)]。絵馬ノ橋、絵馬ノ道の文言が見えることから考えれば、「絵馬をかくる鳥井」は絵馬ノ道西側に隣接する鳥居である可能性が高い。家久は承応の絵図中西側（左側）から東側（右側）へ向かって旅していることから、史料中【斎宮】と言及している個所は、「絵馬をかくる鳥井」より西側に位置する「野々宮」に該当するとするのが自然であろう。そこで、藤原長兵衛による寛永４年（1627）初版、宝永４年（1707）校訂の『伊勢参宮按

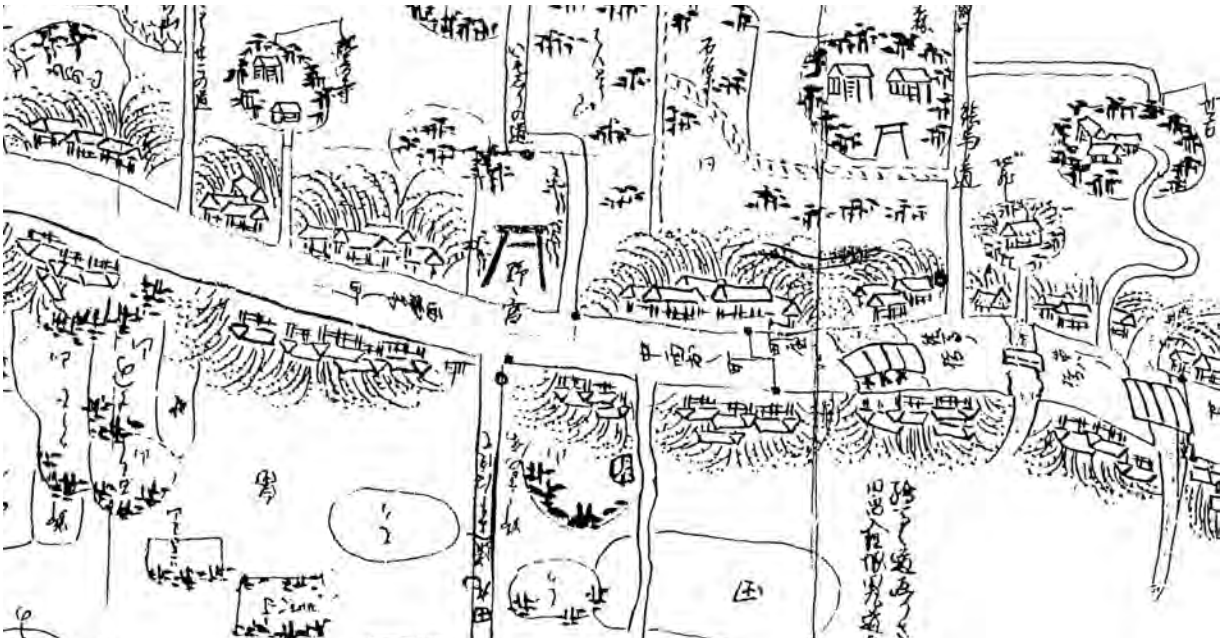

図４　承応３年斎宮村絵図（部分）※図の上が北

内記　巻上』をみると、

〈史料７〉

今の斎宮村の大道の北に松杉生茂りて、一むらの森有。是斎宮の舊趾なり。俗に是を野宮といふ。甚誤り也。野宮とは斎宮に立せ給ふべき皇女、京にて斎したまふ所をいふなり。今猶嵯峨に野宮の舊跡とて、かたばかりのしるし有けるとかや。

との記述があり、大道の北にある森を『斎宮』の旧跡と認識し、それを「俗」に「野宮」と呼んでいることが分かる。なお、この史料７の【斎宮】、承応の絵図中の「野々宮」の位置は今日の竹神社の位置に該当する。

以上の整理から、16世紀段階において、住人は斎宮地の東部で鳥居にかけられる絵馬に加え、街道筋に面した森を「野々宮」と呼称し、これを媒体として『斎宮』を語り、引き続き斎宮地を斎宮跡として認識していたものと考えられる。

(5) 17世紀～19世紀の斎宮

17世紀以降、発掘調査では、近世以降の参宮街道沿いに土器の出土が認められる。この時期には、近世街道筋が有効に機能しているものと考えられる。

一方、近世になると斎宮地について描写した文献史料は増加し、絵図も見られるようになる。例えば、寛政９年（1797）に出版された蔀關月の『伊勢参宮名所図会』では、斎宮村が絵図入りで紹介されており、本文でも詳述されている（図５）[20]。

〈史料８〉

斎宮旧跡　俗に斎宮の森と云尤深林奥に小祠あり坂士佛　参詣記云　斎宮に参りぬいにしへの築地の跡とおぼへて草木の高き所々あり鳥居ハ朽残りたるか道によこたハれるを人だにもかくとしらせすはただふし木とのミそみて過なまし云々

○今黒木の鳥居海道に植たり其内に天神の社あれどもその鳥居にはあらず斎宮の後のしるし也俗にこれを野々宮といふは誤りなり

本文では、稲置川（竹川・祓川）を越えると、斎宮の森があり、深林奥に小祠があるとする。さらに街道沿いに進むと「黒木の鳥居」があり、内に天神があるとしながらも、この鳥居はここに『斎宮』があったことを示すものであるとする。また、坂十仏の参詣記を引用し、「野々宮」と呼ばれていることも示す。絵図を見ると、左側の森には「斎宮の森」の注記があり、森には小祠・立札・注連縄がみえる。さらに、雲を境に画面がかわって「絵馬殿」と注記された建物、橋、「天神道」の注記があり、ここに、鳥居・石灯籠・標石・立札が見える。本文と照合すれば、「斎宮の森」が斎宮旧跡であり、天神道入口の鳥居が「黒木の鳥居」となる。

まず、「斎宮の森」について、その位置は先に検討

図５　『伊勢参宮名所図会』斎宮村（部分）

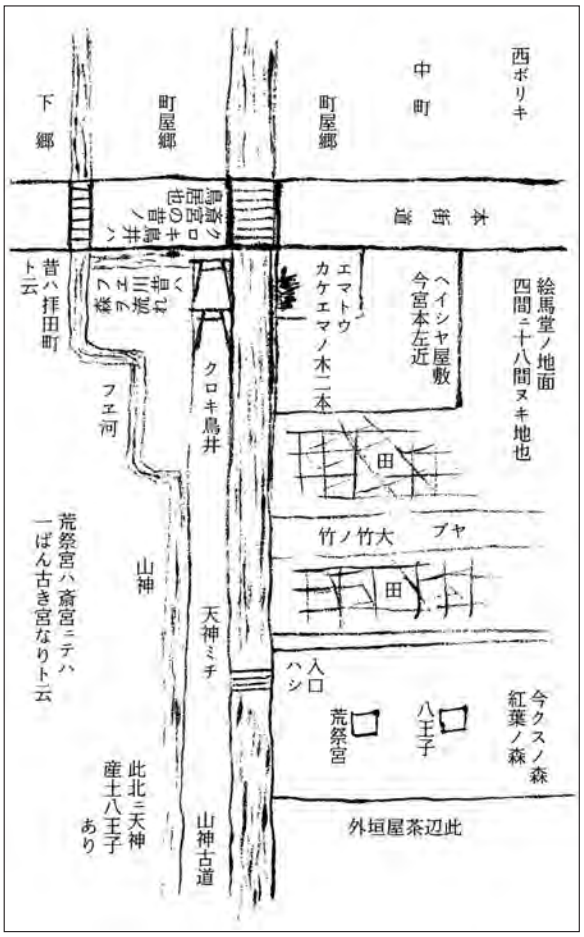

図6　神三郡神社参詣記（※図の下が北）

図7　絵馬殿跡、黒木の鳥居跡とエンマ川（南から）

図8　竹神社

した16世紀段階から変化ないものと考えられる。しかし、承応の絵図では鳥居のみがしるされて、域内に建物などは示されていなかったのに対し、『伊勢参宮名所図会』においては、域内に小祠や高札、注連縄などが見られる。

一方、絵馬については、16世紀の段階と状況は異なる。承応の絵図では、絵馬をかける鳥居は、街道よりも北側に奥まった位置の楠の森に見られた。一方、『伊勢参宮名所図会』においては、絵馬を掛けると見られる絵馬殿は街道に面しているように見える。

そこで、明治２年（1869）頃に斎宮地を訪問した世古口藤平が遺した絵図を見ると（図６）、街道に面して「エマトウ（絵馬堂）」があり、その北側には八王子社と荒祭宮２棟が東西に並ぶ「クスノ森」がみられる。つまり、街道沿いの絵馬堂は承応年間以降、寛政年間までの間に設けられ、絵馬掛けの場所が楠の森から絵馬堂へと移されたものと考えられる。

さらに、『伊勢参宮名所図会』には承応の絵図には見られなかった「黒木の鳥居」が登場する。黒木の鳥居は、『伊勢参宮名所図会』においては「斎宮の後のしるし」とされ、世古口藤平は「クロキ鳥井ハ斎宮の昔ノ鳥居也」として斎宮の鳥居そのものであるとしている。黒木の鳥居は源氏物語「賢木」の段に登場する「野宮」の黒木の鳥居を連想させるもので、『斎宮』を連想させるものと考えられる。

このように、17世紀から19世紀前半の斎宮地においては、森の小祠や絵馬堂、黒木の鳥居などが街道沿いに次々と整備されているものと考えられる。その整備の主体については不明とせざるを得ないが、世古口藤平が絵馬堂の来歴について絵馬堂所在地の住人から聞き取っていることから、地域住民がこれら整備を行ったものと考えて大過ないと思われる。つまり、地域住民は、森と小祠、絵馬堂、黒木の鳥居を媒体として、それらが斎宮と関連するものであるという語りを行い、引き続き斎宮地を斎宮跡として認識していたものと考えられる。

（6）明治時代から発掘調査開始まで

明治時代に入ると、『斎宮』を語る媒体は大きく変化する。

図９　楠の森跡

図10 「斎王御舘之遺蹟」碑

図11　斎王の森

図12「斎王宮阯」の碑

まず、「斎宮の森」は、明治42年（1909）に斎宮神社に、さらに明治44年（1911）には近隣の神社を合祀して郷社竹神社とされ、この竹神社が今日まで存続している（図８）。一方で、この合祀に際し、楠の森に祀られていた八王子社と荒祭宮は廃されている（図９）。また、絵馬殿は絵馬一面を合祀された竹神社に納め、大正元年（1912）頃に取り壊されたという。黒木の鳥居については、明治34～35年(1901～1902)頃までは遺っていたが、その後再建されていない[21]（図７）。

一方、近世参宮街道沿道以外の位置においては、顕彰活動が盛んに行われるようになる。まず、『斎宮』に由来すると思われる地名の個所に石碑が建てられる(図10)。石碑の造立年代は不明であるが、早ければ明治14年（1881）までさかのぼる可能性が指摘されている[22]。また、昭和４年（1929）には、「史跡斎王旧阯」の碑が「斎王の森」に建てられる。斎王の森は方格地割の北西角に該当し、近代以降、学術的な考察に基づき、斎宮旧跡の中心地とみなされた位置である[23]（図11)。さらに昭和34年（1959）には地域の共有地であった斎王の森が伊勢神宮（神宮司庁）へ奉納され、昭和43年（1968）には斎王宮阯の石碑が設置されている（図12)。

このように、明治時代以降、地域住民は「石碑」や「斎王の森」へと媒体を変えながらも、引き続き斎宮地を斎宮跡として認識していたものと考えられる。

(7) 発掘調査開始以降

最後に、発掘調査が開始し、考古学や文献史学による調査研究が展開されていく中で、地域住民は『斎宮』をいかに語っていったのかを見てみよう。今日、斎宮跡最大の祭典である「斎王まつり」(図13）は昭和58年（1983）に地元の斎宮婦人会の発案によって開始した。その開始にあたって、その実施理由は以下のように語られている。

〈史料９〉

斎宮婦人会（内山たね会長）では、二月五日の支部長会議において、三月二十八日（雨天）に斎王の森で「斎王まつり」を行うことを申し合わせ（斎宮地区商工会協賛）今その準備が進められつつあります。(中略)「このままでは斎王さんはい

つまでも浮かばれぬ。幼くして都を離れ、人身御供同然の斎王さんの中には、この地に骨を埋めた人も少なくない。女性は女性同士、せめて地元に住む私達だけでも弔っていきたい」ということから、斎王まつりへと進展。（中略）祭りの会場にあてられる斎王の森は、現在保存整備が行われており、それが三月二十八日に完成することから、この日の祭りは、復元現場だけに一段と盛り上がりが見られるものと期待されております。（中略）大人も子供も楽しめるお祭りにし、郷土に保存する国家的な遺跡を再認識していこうと、なかなかの熱の入れようです。斎宮寮は後醍醐天皇の時代以降荒れ果て、先人はその荒廃を目のあたりにみて、心を痛めてきたと言われます。明治に入ってからでも長島・乾・北野・櫛屋など地元の各氏によって建議書を政府へ提出し復興を要請、（中略）残念なことにその成果をみるに至りませんでした。こうして考えてみると「斎王まつり」は大きな意義を持っており、そうした過去数々の故人の熱意に対してもこれまた大きな返礼となるでしょう。

この中で婦人会は、斎王まつり開催の理由として、斎王の慰霊、国家的遺跡の再認識、先人の斎宮顕彰に対する熱意の継承を挙げている。斎王への慰霊と国家的遺跡の再認識は、文献史学と考古学の研究成果を地域住民が知ったことによって新たに発生した語りであると考えられる一方で、先人の斎宮に対する熱意の継承は、斎宮跡廃絶後、地域住民が続けてきた斎宮跡に関する語りを継承したものとして捉えることができよう。

このように発掘調査開始後においても、斎宮地の住民は、学術的研究成果を踏まえて整備された史跡を媒体として新たな語りを展開するとともに、斎宮官衙廃絶後に語り継いできた伝承を継承していると言える。

3．まとめ

以上、本稿では斎宮官衙が機能していた11世紀段階から斎宮官衙廃絶後、現代に至るまで、地域住民が斎宮／斎宮跡を、何を媒体として、いかに語り、認識してきたかについて整理した。

11世紀から13世紀にかけて、『斎宮』は建築や官人を通して、機能する斎宮官衙として認識され、その認識の位置の中心は現在の竹神社付近ないしその周辺にあったと考えられる。斎宮廃絶後の14世紀になると、住人は荒田や土盛り、伏し木を『斎宮』の遺構として語り、「野宮」という名称で呼称して、斎宮の跡地であると認識していた。15世紀には、斎宮地東部において、住民は絵馬を媒体にその奇譚を『斎宮』の証拠として語り、斎宮の跡地として認識していた。16世紀には住民は斎宮地東部の絵馬に加え、斎宮地中心部の森を媒体に斎宮の故地であると語り、斎宮の跡地であると認識していた。17世紀から19世紀前半にかけては、住民は小祠や絵馬殿、黒木の鳥居を整備しこれらを媒体として、『斎宮』が存在した証拠として語り、斎宮の跡地として認識していた。明治時代から昭和に発掘調査が開始するまでの間には、神社の整備や、石碑の設置、斎王の森の寄付などの行為によって、斎宮地は斎宮の跡地であるとの認識を示していた。このように、

図13　斎王まつり（明和町提供）

地域住民は斎宮官衙の廃絶以降、媒体は様々に変化させながらも、それらはこの地域が『斎宮』の跡地である証拠であると語り、この地域を『斎宮』の跡地であると認識し続けてきたといえる。

昭和45年（1970）に開始した発掘調査によって検出された遺構や遺物が『斎宮』と関連付けられて理解されたのは、斎宮官衙廃絶後、地域住民が『斎宮』の跡地であることを語り続けてきたからに他ならない。すなわち、斎宮跡は昭和時代に入ってから行われた学術的な発掘調査が「発見」したのではなく、地域住民の伝承の中に形を変えながら存在し続けてきたと言えよう。そして学術的な調査結果が積み重ねられる今日も、地域住民は学術的な知見に基づく新たな語りを付加しながら、これまでの語りを継承することで、遺跡の保護へ参画する動機としていると考えられる。斎宮跡の住民はこうした遺跡との意味ある関係性によって、「斎王まつり」だけでなく、史跡内を案内する「斎宮ガイドボランティア」や、復元建物の管理を行う「呉竹クラブ」など、様々な形で遺跡に関わり続けている。

このように、学術的研究によって見出された価値だけではなく、地域住民が遺跡に見出してきた価値を遺跡の価値として認め、学術的価値と並置することで、地域住民は先人の思いを継承し、遺跡の保護に積極的に参画していくものと考えられる。

蛇足ながら、筆者は平成26年（2014）から平成27年（2015）にかけて、斎宮跡の歴史公園において、地域住民の若者有志とともに音楽イベントを開催したことがある。そのイベント名を決めるに当たり、斎宮官衙が機能していた時代と今日において全く変化していないものは何かと頭をよせあって考えた。「空」ではないかとスタッフの意見が一致し、イベント名を「SAIKU SKY」と名付けた（図14）。これもまた、『斎宮』をめぐる新たな語りである。

【註】

1）本稿は令和３年（2021）３月６日に開催された日本遺跡学会オンライン研究会「遺跡のなかの民俗学」に合わせ、「斎宮跡伝承の形成過程」（伊藤文彦 2018「斎宮跡伝承の形成過程」『斎宮歴史博物館紀要』27号）を、視点を地域住民による斎宮の認識に据え直して改稿したものである。引用文献が異なるなどの違いもあることから、別稿として扱われることを希望する。

2）World Heritage Committee Decision 31COM13B: The “fifth C” for “Communities”.

3）UNESCO,ICCROM,ICOMOS,IUCN(2013):An inclusive approach：MNAGING CULTURAL WORLD HERITAGE, p.15.

4）文化庁 2018「平成30年６月８日付30庁財第128号文化財保護法及び地方教育行政の組織及び運営に関する法律の一部を改正する法律の公布について（通知）」p.2。

5）片桐は歴史的環境問題では生活者の視点の重要性を指摘する。片桐新自 2000「歴史的環境へのアプローチ」『歴史的環境の社会学』。

6）例えば国史跡斎宮跡協議会の活動や、昭和58年から開催されている「斎王まつり」、斎宮ガイドボランティア等の活動が史跡内において広く行われている。

7）山澤義貴 2005「第一節　近世・近代の旧跡顕彰」『明和町史斎宮編』明和町。

8）大川勝宏 2005「第二節　平安時代後期の斎宮跡」『明和町史斎宮編』明和町。

9）天野英昭 1998「中世の斎宮―方格地割との関連から―」『Mie history』vol.9。

10）伊藤裕偉 2003「中世後期における斎宮の交通路と関所」『斎宮歴史博物館研究紀要』12号。

11）榎村寛之「「野々宮」の地名「斎宮の宿」展によせて」『斎宮歴史博物館ホームページ　斎宮百話』https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/saiku/hyakuwa/journal.asp?record=71、2021年３月10日閲覧。

図14　SAIKU SKY（左：フライヤー　右：開催状況）

12）本図は平成29年（2017）までに発刊された斎宮跡にかかる発掘調査報告書から筆者が作成した。図版の作成には、註10の文献に示される中世の交通路に筆者が一部加筆したものを道路として記入した。

13）坂十仏が目撃した斎宮官衙の遺構は、十仏来訪９年前の元弘３年（1333）に朴定された後醍醐天皇の皇女祥子内親王のために一部造営され放棄されたものである可能性もある。ただし、少なくとも十仏は築地塀のあとについて「いにしへ」のものとしており、「近此再興」あったものとは無関係のものとして認識していると考えられる。

14）ここで「案内者」という人物が、斎宮の辻に立つ地域住民なのか、長親らの先達を務めるものかは判然としない。しかし場所や対象物を特定した語りをしていることから、その情報は現地における地域住民の語りの内容を反映していると考えられる。

15）岩井宏美 1974『絵馬』法政大学出版局 p.p.28-30。

16）櫻井治男 1977「斎宮の絵馬堂と謡曲「絵馬」」『皇學館論叢』第10巻第３号。

17）前掲16）。

18）三重県教育委員会 1986『伊勢街道―歴史の道調査報告書』より転載。

19）味噌井拓志氏の教示によると、さらに時期の下る文化３年（1806）の『伊勢路見取絵図』においては、楠の森の位置に「斎宮絵馬旧跡」の文字が見られるという。ここが絵馬堂設置以前の絵馬掛けの場所であったことを示していると思われる。

20）蔀 関月 1797『伊勢参宮名所図会』、国立国会図書館デジタルコレクションの画像より作成（http://id.ndl.go.jp/bib/000010974522）。

21）鈴木直吉 1935「社寺舊蹟篇」『齋宮村郷土誌』（明和町 1978『郷土史に見る齋王』所収）。

22）榎村寛之「第68話　謎の「御館」の碑」『斎宮歴史博物館ホームページ　斎宮千話一話』https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/saiku/senwa/journal.asp?record=392、2021年３月10日閲覧。

23）『齋宮村郷土誌』では「齋宮寮址」の項の中で「齋王森」を斎王の宮殿跡と想定している。鈴木直吉 1935「齋宮寮址」『齋宮村郷土誌』。

【史料出典】

春記：古瀬奈津子「「田中本春記」について―長暦二年八月・九月条の紹介―」『国立歴史民俗博物館研究報告第50集』

中右記：『増補史料大成　第十二巻　中右記四』

太神宮参詣記：『群書類従第二輯』1987 続群書類従完成会

耕雲紀行：『大神宮叢書神宮参拝記大成』1976 臨川書店

碧山日録：『改定史籍集覧　第二十五冊』1902 近藤出版部）

伊勢紀行：『大神宮叢書神宮参拝記大成』1976 六臨川書店

中書家久公御上京日記：『鹿児島県史料旧記雑録後編一』（三重県教育委員会 1982『初瀬街道伊勢本街道和歌山街道』所収）

伊勢参宮按内記巻上：『大神宮叢書神宮参拝記大成』1976 臨川書店

伊勢参宮名所図会：国立国会図書館蔵

神三郡神社参詣記：2005 皇學館大學神道研究所

斎王まつりのあゆみ：斎王まつり実行委員会